

ハーディ小説管見

—二つの短編小説を中心に—

宮田 実

Thomas Hardy の短編は、ほとんど四つの短編集に収められている。つまり Wessex Tales (1888), A Group of Noble Dames (1891), Life's Little Ironies (1894), A Changed Man and Other Tales (1913) の中に。世界の学界では、本国イギリスを除くと、アメリカ、日本、印度などが Hardy の研究に熱心で、その研究書も年々かなりふえて出版されているのが現状だが、従来、Hardy 研究といえば、長編が主で、とくに後期の作品と詩が論ぜられる程度で、短編はどちらかといえば、作者の余技程度にしか考えられないで、重視されなかつたうらみがある。

ところが最近、この短編に注目し出したことは見逃してはならない傾向で、たとえば、研究書の中で採り上げたものは、A・J・Guerard, Douglas Brown, George Wing ①があり、日本でも、研究発表や研究書の中にぼつぼつとり上げられて、論ぜられてきたことを知るべきである。これを例を山にとってみると、高く聳え立つ長編小説に比べると、その周辺をとり囲むやや低い山々といった感じが濃く、山の形も似ているし、その小型の峯々といってもよいであろうか。

よくいわれるように、その短編は、長編の圧縮されたようなタイプをとっているのは事実で、story-teller としての作者の面目がよく発揮されているし、又一方で、長編に隠された特質が比較的露呈されている向きがあるといつてよいであろう。ここで、少し短編をもち上げていってみれば、性格と環境とから生ずる悲劇や運命の皮肉などが、長編よりも一層端的に、かつ、隠かに平明に描かれ、人生が終始一貫灰色に塗りつぶされていることを描くと同時に、苦痛に耐え、その不幸な運命と戦う人間の尊く美しい姿が感ぜられて、むしろ心あたたまものであることを知るのではなかろうか。人生の最悪を凝視し、真実をリアルに追求してやまない自然主義作家としての作家的良心は、とりもなおさず、ヒューマニスティックな人間愛に燃える心であるといつてよいであろう。

作品の中には人間を運命の前に置かれた無力な存在として描くものが数多く見られる。そしてこの宿命的人生観を小説に表現するため、人間のいとなみの浅慮や遅すぎた秘密の告白など、人生の偶然をあまりに多く用いて、小説を真実よりも奇なりとした偶然の一致で plot を運んでいく手法を、あえて、故意に用いている感がしないでもない。それにも拘らず、plot の扱いは、巧妙をきわめ性格と環境を織り交ぜる手段として上手に描き出すのである。おそらく、その天分もさることながら、建築家として出発して、その技術を身につけたという作者の閱歴の現われでもあろうか。

Hardy は、過渡的作家である。はじめに、彼が28歳のとき処女作「困窮者と淑女」(The Poor man and the Lady) を書き、当時Macmillan 社の編集長をしていたメレディス(George Meredith 1828—1909) から、社会批判が強く出ているから書き直してはという忠告をうけて、その間、Chapman and Hall, Finsley Brothers の間をめぐり Hardy の許に戻った経緯があるが、1868年に出版を断念し、これはその後、1878年に An Indiscretion in the life an Heiress となって出版されるといった経緯があるが、1871年、1872年には匿名で、推理小説的要素の濃い「窮余の果てに」(Desperate Remedies) と牧歌的な田園小説「緑の木蔭」(Under the Greenwood Tree) を発表したのであった。その翌年、初めて Thomas Hardy の本名で「青い眼」(A pair of Blue Eyes) を上梓し、次の年に、出世作となった「遙か群集を離れて」(Far from the Madding Crowd) を発表したのである。

匿名で書いた前記の二作は、世評では、George Eliot の作ではないかとうわさされた程で、作風が似通っていたことは興味深い。そして次の1876年に「エセルバータの手」(The Hand of Ethelberta) を書いて、1878年に、「帰郷」(The Return of the Native) を Smith 社から三冊本として出版したわけであるが、この作品を契機として、自分の追求すべきテーマを見出し、ヴィクトリア朝後半を代表する小説家としてのスタートを切ったと断じてよいであろう。(それは作者が丁度38歳のときであった。)

つまり、Hardy の底流には、ヴィクトリアニズム批判が強くあったにも拘らず、文壇に出るために、彼の本来持つ芸域の広さから、余り抵抗をうけないですむ作品を書いてデビューした。そして、19世紀後半のイギリスの経済状況の斜陽的変貌をうけて衰退の一途をたどりつつあった故郷 Dorset の変りように、敏感に影響をうけながら、又、学歴らしい学歴もなく辛い目にあったと想像されるその閱歴から、現実批判、偶像破壊をテーマとする自然主義文学にとりわけ後期から急速に進んだとみられる。いってみれば、前期では、「緑の木蔭」(Under the Greenwood Tree) のような叙情詩的な作品、浪漫主義的作品や、前にも述べたように長編では Desperate Remedies や時期が一寸後期になるが、短編では Interlopers at the knap のような現代流行の推理作品の元祖と思われるものや、茶の間のテレビドラマ風の軽いタッチの映画的手法の元祖とも思われるものまであって、全く、底なしに深く、又、幅広い作風を完成させる天才的力量をもっていたのである。

Hardy がもしも19世紀初頭に活躍した作家であったとすれば、おそらく、Wordsworth や先輩の Willam Barns のように、イギリス西南部の故郷 Dorchester の自然を歌う田園詩人となったが、一寸ぴりりとからいわさびの効いた牧歌的な物語りを書いて終ったかも知れない。ところが、Hardy は、わが国の島崎藤村や、長塚節や、アメリカ19世紀の Hardy と同時代に活躍した Ambrose Bierce や Bret Harte のように、いわゆる local colorist として、故郷にとどまり、こよなくそこを愛し、農村から離れられなかったのであって、Hardy の見解の基盤となったものは、貧しい、大地にすくと樫の大木のように根強く生きる(たとえばテス(Tess)のような)自由農民の精神であり、その農民、労働者の味方として、つねに、その哀歎は、Dorset

地方の自然とつよく結ばれていたのであった。

この拙論を発表する紀要の創刊号、第三号の中でも度々筆者がくり返し述べてきたように、Hardy の生きた時代は、必ずしも、明るく、希望にみちたものでなく、現在のアメリカが世界一の G.N.P. を誇り、世界一の強力な軍隊をもつ大国であったのが、十年余にわたるヴェトナムの戦争、ソヴェトとの軍備拡張競走による宇宙ロケットや諸種の新兵器の開発のために要する膨大な出費によって、高度に発達した帝国主義的経済発展のゆきづまりと相まって、昨年来のドルショック、数年前の 8 % の赤字から漸次大幅な赤字財政へと陥んで、大統領ニクソンの突然の訪中など一連の big news は、つまる処、斜陽化したアメリカ経済の実態を白実のもとに露呈したと断ぜざるを得ないが、これとよく似た現象が、Hardy の生きた 19 世紀後半に早くも現われ、ひどく斜陽化して、かつての大英帝国、けんらんたるヴィクトリア王朝時代にピリオドを打つ結果となったとみてよいのではなかろうか。そこでは、産業主義の波にのった新興の都市ブルジョアジーが、不断に農業経済を圧迫し、功利主義哲学の庇護のもと、自由と解放をスローガンとした労働者、農民の叫びが、平和な農村の族長的秩序を真底ゆさぶった時代であった。

長い間守られてきた秩序が急激に崩壊し、新しい社会制度がそれに変る時、混乱が生じ過去の制度に愛着を感じていたものが、苦痛と悲しみを味うことも事実である。しかも、この時、農村の社会は、地主、自作農、小作農、そして peasant と分れており、極めて封建的な社会的羈絆にがんじがらめにされていたとはいっても、反面、緑の木蔭 (Under the Greenwood Tree)、帰郷 (The Return of the Native) キャスタブリッジの市長 (The Mayor of Casterbridge)、テス (Tess of the D' Urberuvilles) などの作品中に現われる素朴な農民の方言をまじえての楽しげなカタライなど、ある種の人間的交流が素朴に相互に存在したことも忘れてはならない。その時の解放を叫ぶ人達の論理は次のように解説される。

「人間は、自分をつなぎとめている社会集団から、出来れば、すぐれた頭脳と富をもって、そして、他に何もなければ強い腕をもって、自由独立に自己を解放しなければならない。このように解放され、孤立したときには、人間は万人に対し、又、一人ひとりに対して、情容赦のない生の闘争に従事しなければならない。……競走が彼等の経済的行動と等しく、彼等の思想の必然の形態であって、世界は……強者と弱者の闘いが営まれる闘技場であった。別れた人は、お気の毒ながら踏みつけにされる。銘々われ勝ちで、イギリスの法律は万人無差別、こういったものが産業主義のモラルである。」②

ここで踏みつけるものは都市商工業階級であり、踏みつけられるもの、被害者は敗者として地方の農民、労働者であったわけである。現在の日本でいえば、踏みつけるものが大資本家、独占資本家であり、踏みつけられるものは常に善良な市民農民労働者であるのとよく似ている。昨年を頂点として社会的問題化した、公害の問題、つまりモータリゼーションによる排気ガスの充満する光化学スモッグ、大都市近郊の無計画な宅地造成による緑の喪失、工場排水による得体の知れない致命傷的な公害病による被害、交通戦争などあげればきりが無い。

つまり、われわれがつぶさに経験しているモータリゼーションの問題はいざ知らず、公害問

題、農村の疲弊問題が、一世紀近くも前に既にイギリスで経験されていたわけである。資本主義が帝国主義的段階に入ったイギリスは、当然のことながら、産業主義が強要した農業様式の変革となって現われ、少数の大農場経営者に統一される反面、大多数の自作農、peasant は大打撃を受け、村落から低賃金で都市の工場へと刈り出されたのであった。Hardy は、この衰退の一途をたどる農村の息吹きをつぶさに感じ、増大する労働予備軍のしわよせをうけて、二重のパンチをうけた農民労働者の状態をみるにつけ、出稼ぎ農民の急増又は昭和初頭の東北農村の“娘の人身売買”にも見られるような状態が現に当時起っていたのである。ちなみに、テス (Tess) のダーヴィフィールド (Durbeyfield) 家への奉公と、アレック (Alec) におかされて、これを憎みながらも遂にその囲われ女となった一連の事件もまさにこれを symbolize しているといつてよいであろう。さらに1870年は、イギリス農村にとって一層暗い時期となるのである。

1870年後間もなく一つの経済変動が始まった。それは雇用と所得の主な源泉としての農業が衰退したことである。これは漸次的な衰退としてではなく、突発的大変動として現われたため、ヴィクトリア朝の社会、経済生活を構成する一見して堅固、確実に見えた幾多の諸要素を奪い去ったのである。この事実は……農場のみでなく、一般国民の世論に対しても大きなショックを与えた。思うに、農業恐慌の根本原因は、新しい世界的食糧供給源の出現と鉄道や蒸汽船による新しい交通制度の抬頭に求めらるべきである。③

このような社会的背景を考慮に入れて Hardy の作品を観察すれば、また自らその作風が当時流行した先駒的役割を果たしたフランスの自然主義文学の影響をうけて、自然主義文学へと必然的に移行していった理由が把握されるであろう。都市と農村の相剋、換言すれば、大資本と小市民との相剋は、あらゆる作品に表現されているといっても過言ではない。すなわち、「遙か群集を離れて」(Far from the Madding Crowd) の中で、既に、農村文化の継承者と目されるボールドウッド (Boldwood) が破滅すること、「帰郷」(The Return of the native) では、ユーステシャ・ヴァイ (Ustacia Vye) が彼女の心から鬱勃と吹き上げてくる情熱によって、いみ嫌う荒野との戦いに敗れて、シャーウッド・ウォーター (Sherwood Water) の堰に投身して物語は終るのであり、ユーステシャ (Ustacia) はエグドンが象徴する旧文化と戦い、敗北して死ぬのである。

Arnold Kettle の “An Introduction to the English Novel” ④でも述べてあるように、テス (Tess) の悲劇、つまり、Tess が飲んだくれの単純な父親と無教養な母のもとで、一家の生計を支えるために、年端もいかない少女でありながら、健気 (けなげ) にも小さな弟を伴って、夜、大事な馬 Prince に荷を積んで働きに出かけるのだが、不幸にも暗がりのために馬が鉄棒に当たって、その場で血を吹き出したまま死んでしまう。悲嘆にくれたテス (Tess) はこれがもとでダービフィールド (Durbeyfield) 家へ奉公に出かけなければならぬ運命に陥って、結局悲劇のヒロインとなるが、この暗がりでの馬車の突然の事故死。

これは、まさに、テス (Tess) 及びその一家は peasant であり、これを崩壊させたのは、産業資本、大資本だといつてよいであろう。「キャスタブリッジの市長」(The Mayor of Caster-

bridge)でも、主人公ヘンチャード (Henchard) は一乾草刈職人であり、産業主義、大資本の大きな圧力の前に大海原にただよう木の葉のようにはかなく翻弄され、一時は経済的変動、好景気から、一躍麦の値上りによって市長にまでかつがれるが、それも東の間麦の価格の急激な変動によって、もとのもくあみ、一介の一乾草刈職人に転落して物語は終る。いわば波瀾万丈の一代記となるが、これも一つの象徴的生涯ではなかろうか。

さて、「二つの野心の悲劇」(A Tragedy of Two Ambitions)の荒筋は次のようである。もとは真面目に働いていた腕のたつ水車大工の棟梁(とうり)が、ふとしたことから強い飲酒のためにすさみきって、ついにアルコール中毒にかかり、二人の頭もよく真面目な、出世欲にとりつかれた(当時としては無理のないことだが、なにしろ、わが国では“人間到る処青山あり…”の名文句が大流行した頃のことであるから)、好青年のために残してくれた母の遺産もすっかり飲みつくしてしまったために、この青年兄弟は、常に父を憎み呪っていたが、大学進学を諦めて独学で神学校を卒業して副牧師となった。彼等は妹のローザ(Rosa)を何とか玉の輿にのせたいと苦慮して、それを果すこととなるが、当のアル中の父が金をせびりに外国から帰ってきたこと、それにジブシー女まで妻にして戻ったことで、外見、見栄、格式を重んずる当時のイギリスの牧師界でなんとか兄弟妹三人がうまくやるためにはそれは致命的な障害となる。そのため血のつながった親子でありながら、のんだく来て急流に落ちこみ、兄弟二人が蔭れて見ているその目の前で助けを求める父親を救おうとする弟のコーネリウス(Cornelius)の腕を兄のジョシュア(Joshua)が掴んで引戻し、その結果溺れた父を死なせてしまう。この辺の描写はまさに鬼気迫るものがある。三人は勿論めいめい立身出世の思いを遂げる。死体の身元は遂に分らずじまいになって兄弟の願いはかなえられはするが、果してその心情はどのようなものであろうか。まことに複雑な悲しい野心であったことは想像に難くない。

ここで Hardy は立身出世主義者の人間性への盲目性などをテーマとしたのであろうが、この兄弟はその犠牲者だと考えたに違いない。村人たちが産業主義という機構に追いたてられ、「闘技場」の中で傷つけられ、打ち挫かれねばならなかったことを象徴的に描いているのである。Hardy は悲痛に声を大にして叫ぶのである。何物も止め難い力をもって農村は変えられ、圧倒され、みじめな屈状を余儀なくされ、その抗し難いしくみにねじ伏せられて、平和なかつての田園にピリオドを打つ Hardy の愛した農村とその文化が余りにも惨めに蹂躪されるのを正視出来なかったのであろう。

「息子の反対」(The Son's Veto 1891)の荒筋は、田舎出の貧しい教養のない小間使のソフィ(Sophy)はもと牧師(当時は貴族階級にも匹敵する階級)の家で病気の牧師夫人の食事を運んだあと階段から足をすべらしてびっこになる。彼女には若い園丁のサム(Sam)という恋人があったが、夫人の亡きあと、牧師は同情心がもとでその後妻にと懇望される。日頃尊敬している牧師の言葉に、愛情とか、その後の家庭内の難しさ等考えずに一も二もなく承諾してしまう。結婚後、牧師は世間体を気にしてロンドンの場末の小さな教会に移る。ここで十数年の孤独な生活を送ったあとで夫の牧師は死ぬ。彼女は夫が買ってくれた別荘でひとりわびしく暮すのだが、唯

一の頼りである息子が public-school で貴族的な教育を受けたために、ことある毎に、無教養な小間使いあがりの母親を軽蔑するので味気ない気持で悶々の日を過す。退屈しのぎに二階の窓から前の真直な街道を眺めていると、市場通いの荷馬車に、思いもかけず、昔の恋人サム (Sam) が乗っているので驚いて突然声をかける。二人は以前のように親しくなり、やがて Sam は Sophy に結婚を申込む。Sophy もその気になるが、牧師の跡継の一人息子は、身分の違いを口実にして絶対に承諾しない。Sam は町でかなり大きな果物屋の主人となって Sophy を待つが無情な息子の反対にあって、到々望みを果さず死んでしまう。そして、その葬式の行列がサム (Sam) の店先を歩いていくのが見えた。Sam は店先に立って涙を浮べてその車に向って帽子をとった。葬儀馬車からは牧師特有のハイ・カラーの若い牧師が、その店主を、こともあろうに、けわしい目付で、じろりと見おろしたというのである。

この短編は、「二つの野心の悲劇」と同じように、ヴィクトリアニズムの現実批判、リアリズムの傾向がかなり強く出ているのが特徴である。つまり、特権階級の教育制度、内容がいかに非民主的、アンチヒューマンであるかをかなり辛辣に批判している。Hardy のヒューマンな精神が激しい怒りとなり、偏見の強い貴族階級の批判が露骨に示されているとみてよい。構成も巧みで最初の書出しは現代にも通ずる新しい傾向の映画的手法を用い、わかり易いすぐれた注目すべき作品といえる。

以上の二つの短編は、いづれも Hardy の後期の作品で、長編小説でいえば、その代表作、「帰郷」(The Return of the Native)、「キャスタブリッジの市長」(The Mayor of Casterbridge)、「テス」(Tess of the D'Urbervilles)、「日陰者ジュード」(Jude the Obscure) が、一作毎に陰惨となり自然主義文学の傾向が強く打出されてくるのと同じように、多くの短編中で最も自然主義的傾向の強い作品といえよう。Hardy の原点となる作品、つまり Victorian compromise などの容喙を赦さない酷しさをもっている作品である。

「二つの野心の悲劇」は、「息子の反対」と同じく、構図, plot, 登場人物の多様性及びその数、人物のリアリティなどかなり共通点がある。長編小説を圧縮した小説という点でも。それに性格描写も巧緻を極め、とりわけ「二つの野心の悲劇」では、二人の男兄弟、その妹の描写はかなり読者の脳裏に強い image を与えている。つまり、兄の Joshua は、真面目一方わき目もふらない、直情経行の男で、立身出世の権化的存在。すべてを立身、栄達にかけている。キリスト教の再興のために身を挺するようなことを一応は弟にいいはするものの、所詮牧師となることだけが、そして貧困階級から中産階級へのし上ることだけしか念頭にない男である。これに比べて、弟 Cornelius は兄に比べて遙かにのんびり型で、いつも兄のなだめ役、なぐさめ役を努めてワキ役として神経質で深刻型の兄の性格を一層引きたてている。どちらかといえば、弟の方が正直で隠やかな人間味のあるタイプである。妹のローザ (Rosa) となると、近代的な物事に屈託のない、新しいタイプの美貌の女性で明るい性格で、妹思いの二人の兄の手厚い庇護のもとにのびのびと上級の学校にまで出して貰って、ついに玉の輿にのる恵まれた女性として描かれているが、これもワキ役として兄の Joshua の辛苦とあらゆる苦悩をなめた悪戦、苦闘のドキュメ

ンタリーを対照的に一層極立たさせる役目を果しているといえよう。

二人の兄弟は、終始一貫長短相補い、助け合って逆境に打ち克つ対照的な性格の持主で、しみじみと読者に哀歎を感じさせる点で性格描写はかなり成功を取めたといつてよい。父親の strong liquor も何故そうなったのか、原因は定かでないが、これも前述のように産業主義の機構に追い立てられ、「闘技場」の中でもみくちやにされる農村の崩壊を象徴しているようにも受けとれる。ここから兄弟の悪戦苦闘が始まるのは、「テス」(Tess) や「デュード」(Jude) の場合に酷似しているといえないだろうか。

しかしながら、この飲んだくれの父親は決して憎めない存在である。これは、Hardy が崩壊していく旧制度や踏みつけられる犠牲者として、Hardy の筆はこの墮落しきった男にも拘らず決して非難しようとしてはいない。むしろ愛情をもって、何かしら一種の哀歎と同情に似た感情をもって印象づけるが、その末路はまことにあわれである。彼の墮落やその犯した多くの過誤を二人の息子には憎まれ、ののしられながらも、彼個人の罪にのみ帰さないで、「悲しむべきしいたげられた犠牲者」と考えたからに他ならなかったであろう。

「息子の反対」(The Son's Veto) では、書き出しの部分から既に現代の映画的手法と目される、後からのクローズ・アップで、ソフィ (Sophy) の髪型と髪の色から描かれて、やがて彼女の年格好と容貌が写される。「二つの野心の悲劇」でも、やはり冒頭から、その描写が軒の傾いた水車大工の二階と遠くからきこえる村の祭礼のにぎわいの声と遊びざかりの若者の楽しいげな声をに入れて独学で机に向いきりになった兄弟とは対照的になる映画的手法で幕がおろされる。それから勉強中の少年二人がやや細かく、クローズ・アップされるといった具合に遠近法を巧みにこなしている点で共通しているともいえる。

Sophy は善良な無教養な小間使であるが、ずるずると後妻になってしまう経緯は、やはり、階級的規範の前に個性を圧殺してしまつて昔ながらの因襲と階級制度の犠牲となつて、牧師に対する尊敬という口実で、抜き難い階級制度が彼女に承諾という絶対命令として迫つたのではなかつたか。これが悲劇の原因となり、彼女を不幸におとし入れたそもそもの原因ではなかつたのか。従来、これを運命の皮肉とか、偶然とか、遅すぎた浅慮とかと解されてきたが、も一歩つっこんで考えれば、やはり階級制度、彼女の生い立ち、無教養などがその原因としてとり上げられ見直されなければならないのではないか。息子の母に対する非人間的な仕打ちと、母の葬儀の馬車に乗つてのサム (Sam) のみ下し方は、Hardy の激しい貴族階級の教育制度への怒りとなつて火を吹いた感があるが、これとても息子個人は余り憎んで描かれていないような気がしてならない。やはり、「二つの野心の悲劇」(A Tragedy of Two Ambitions) の飲んだくれの父の場合と同じように、個人の罪に帰さないで、しくみに対する憎しみ、現実批判、貴族階級の教育制度にその罪を帰したからに他ならなかったからであろう。

性格描写の点では、どの登場人物も「二つの野心の悲劇」(A Tragedy of Two Ambitions) のジョシュア (Joshua) 兄弟と妹のローザ (Rosa) や地主のフェルマー夫人 (Mrs. Fellmer) とその息子のアルバート (Albert) などの vivid な reality には遠く及ばない。当然ソフィ (Sophy)

とその息子が主役となるこの作品は、いずれも前者の作品に比べて、その存在の影が薄く、強烈な image を読者に与えていない。とどのつまり、作者が、筋を追い過ぎてしまって、その枠の中に無理にはめ込もうとしたためではなかっただろうか。Hardyがリアリズムの精神に徹して、貴族の教育制度批判、貴族階級批判が前面に出過ぎて、登場人物は止むなく影が薄くなり敷かれたレールをつっ走る列車の乗客として、その存在が勢い薄らいたとみてよいであろう。⑤

イギリス本国で、Hardy の作品は第二次大戦の頃から一層読者を増しているといわれる。しかも戦後死んだ作者のうちで、Hardy が最も広い読者層を持っているというデータがある批評家の調査の結果挙がっている。Hardy は自ら“A thinker of crooked thoughts upon life in the sere”と言っているばかりでなく、“if way to the Better there be, it exacts a full look at the Worst”とも書き、iconoclast として勇敢に非妥協的に芸術の世界で戦った詩人、小説家であるといえる。

Hardy の文学はまさに高峯そのものである。そのために、ややもすれば、従来の紹介の仕方もやれ「東洋的宿命観」に通ずるとか、「運命の皮肉」に終始するとかいった傾向が強かったし、否むしろそういった見方、評価が大きな weight を占めていたが、何故 Hardy の作品がイギリスのみならず、戦後の日本でもこのように多く読まれるのだろうか。それは Hardy の自然主義作家としての良心、新しい人間像を求めての偶像破壊と社会改良を目指す真摯な態度が、あらゆる意味で、末期的症状を呈する現代社会にアピールしてくるためではなかろうか。もちろん文学作品である以上、その底に不可欠の poetic imagination と抒情性を持っていることはいうまでもないことだが、構成が入念を極め、特に小説において、筋運びが dramatic であるという芸術的理由が存在することは言うまでもない。

例えば Immanent Will とか First Cause とか名付けて、Hardy は、人間を支配する運命の盲目的な力の存在を信じ、その故に厭世的な暗い影を持っていた。しかしながら、Hardy はいわゆる「世紀末」のひ弱い厭世主義者とは違っている。彼自身の内部に一種根強い生命力をもち続けていたのも、根源的な「大地の力」に対する素朴な信頼がその支えの一つであったと考えられる。

重く暗い葉むらを広げながら、広野にしっかりと立つ樫の古木のような Hardy の文学的情念は Henchard や Ustacia や Tess や Jude などの主な登場人物の青春を貫くひたむきな生き方に投影して、鮮かに結実しているといえる。こういった処に、広い読者層をもつ真の原因があるのではなかろうか。

注

① George Wing は次のような意味のことを述べている。「短編の過少の原因は Hardy 自身が重要なものとみなさず、いわば余技とみなしたところにあるとみていながらも、Hardy の世界の不可欠の一部であって、長編小説よりも短編小説において本質的なものが晶化され、素直に表れているが、それというものも短編では即座に簡潔に事情の呈示を行わなければならないからだ」。

② ルイ・カザミアン（石田憲次・白田昭共訳）「イギリスの社会小説」研究社 1958, P.21

③ William Coat（荒井・天川共訳）「イギリス近代経済史」ミネルヴァ書房, 1957, PP.189-90

ヴィクトリア時代の初期、中期においては工業化の速度は極めて速く、外国貿易の発展もそれに劣らず急速であった。古くから国民所得の源泉であった農業はそれに従って相対的に重要性が減少した。しかし都市に食糧を与えて工業化を可能ならしめたのはイギリス農場の生産高が上昇したからであって、このことは同世紀のずっと後に至るまで工業化を助けた。1873年以後、食糧の国際貿易が増大するようになるまで、イギリスはかなり自給自足していた。もっとも肉や小麦については全く自給自足というわけにはいかなかった。従ってもちろん危険や不便が伴わないわけではないが、包囲攻撃にも耐えたであろう。農業は国民労働力の大きな部分——即ち19世紀半ばの転回点ではイギリス成人人口の約四分の一——を吸収していた産業であった。

- ④ Arnold Kettle は次のように言っている。テス (Tess) が馬 (Prince) を死なせてしまったことや、後に Tess の一家がマーロット (Marlott) の村を追い払われたことを当時の peasant 階級の崩壊であり彼女の一家はこのぼつ落してゆく階級の典型として、ここにこの小説の悲劇性があるのであり、この小説に生命を与えているものはウエセックス (Wessex) の農民の運命に対するハーデイ (Hardy) の本能的な深い理解である」

(Arnold Kettle : An Introduction to English Novel. Volume Two : Henry James to the Present Day P.50—P.51)

- ⑤ Edwin muir (1887—) の『The Structure of the novel (The Hogarth Press 1928)』の中でミュアはE・M・フォースターのハーデイ批判を aramtic novel の章にのせているが、これを更にミュアは批判して、ハーデイの作家としての壮大な創造力を見逃していると結論しているが、問題のフォースターの批判は次のようである。『作中人物というものは自分の本性を事毎にあらわにさらけ出してはならない。そうでないと、「運命」の動きに流し去られるのあまり、読者の現実感が弱められてしまう。……ハーデイは事件を按配するのに因果関係を強調する plot が基盤となり、人物は黙ってplot の要求に従うように命ぜられる。作中人物はさまざまなわなにまきこまれ、ついには手足もろともがんにじがらめになってしまう。即ちたえず強調されているのが運命であり、しかも運命観強調のためできるだけ犠牲が払われているにもかかわらず、全体の動きは (ソフォクレス) の「アンチゴーン」や (ラシーヌ) の「ベレニス」や「桜の園」のように生き生きしたものとは映ってこない。われわれ個々人を通して働いているのではなく、われわれをたち超えた運命というもの——それがハーデイの Wessex novels の心に残る特徴である。そして『Jube the Qbscure』の不運については、ある重大な問題に答えが与えられていない。いや問題とさえされていない。つまり作中人物は hlot のためにつくすことを過大に求められている。ひなびたユーモアを別にすると、彼らは生気に乏しくひからびたものになっている。』
- ⑥ この小論の作成にあたり、特に19世紀後半のイギリスの社会的背景を論ずる個処では、橋本宏氏のトマス・ハーデイ序説——帰郷を中心として——成美堂、イギリス文学第7号) を大変参考にさせていただいた。ここに厚く謝意を表する次第です。